

季硯句集 『松葉日記』

——手錢記念館所蔵俳諧資料（一）——

伊藤 善隆

（湘北短期大学）

摘 要

手錢家の三代目当主である季硯の句集『松葉日記』を翻刻紹介し、併せてこれまで実態の知られていなかった近世中期の出雲俳壇の特色について簡単に解説を加えた。すなわち、季硯をはじめとする大社の俳人たちは、百蘿がもたらした去来の伝を継承しつつ、三刀屋の美濃派の俳人とも共存していた。このことが大社俳壇の特徴であると指摘した。

キーワード：俳諧、季硯、百蘿、大社、手錢記念館

はじめに

出雲国大社の手錢家は、貞享年間に、大社に移り住んだ喜右衛門長光（寛文二年～寛延二年）を祖とする商家で、町役の大年寄を長く勤めた。歴代の当主は文芸にも関心が深く、和歌・漢詩・俳諧に熱心であった。

とくに、三代目当主である手錢白三郎（正徳二年～寛政三年）は、俳号を季硯、また白澤園と称し、同じく冠李¹、また徳園人と称した弟の兵吉郎（享保四年～寛政八年）と共に俳諧活動に力を注いだ。手錢

記念館にはその俳諧資料が伝存する。本稿では、その俳諧資料の中から、季硯の句集である『松葉日記』（稿本）を翻刻紹介する。

一 書誌

書型……写本一冊。半紙本（やや縦長）。

表紙……濃縹色料紙。縦、二四・〇cm×横、一五・八cm。

題簽……左肩無辺緑色料紙。「松葉日記」と墨書。

序跋……なし。

本文……料紙は薄様。每半葉六行内外。各句は一行で記され、端

書きは句に對して、概ね二字程度を下げて記される。

字高……一六・三cm(一丁表「元日や…」を計測)。

丁数……四〇丁(墨付き三六丁)。

その他…全体として調った筆遣いで記されているが、三二丁表四行目からは、ややその筆致に乱れが感じられる箇所がある。裏表紙見返し左下隅に、「濁硯」と墨書。

二 『松葉日記』について

さて、『松葉日記』には、序跋や奥書がなく、季硯の名前も明らかに記されていない。そのため、じつは『松葉日記』のみを見ていても誰の句集であるかは不明である。しかし、『松葉日記』と共に伝来した『葡萄棚』(写本)と題する冊子には、季硯とその親交のあつた俳人たちとの句が収録されており、そこに季硯の句として載るいくつかは、『松葉日記』にも重複して収録されている。また、『松葉日記』に記載される「近江八景」の句は、多少句形に異同があるが、『蕉門名録集』(宝暦二年刊)に「雲州大社 錢季硯拜書」として収録されることも確認できる。さらに、『松葉日記』の筆跡は、記念館に残された季硯の筆跡資料と比較して誤りのないものである。以上の諸点から、『松葉日記』は季硯の句集であると判断することが可能である。

また、『松葉日記』には成立を明らかに示す年記もない。ただし、三三丁表には、安永二年の柿本人麻呂一千五十年忌にあたって詠じた句が収録されており、それ以降の成立となる。しかし、前節に記したように、三二丁表三行目以降はやや筆致が変わる箇所があり、また末尾四丁は白紙のまま残されていることを考えると、あくまで稿本として

未完に終わったものと考えることが適當であろう。

なお、記念館には、もう一部、同名の写本(半紙本一冊、料紙は楮紙)が伝存するが、そちらは季硯の備忘のためのノートのような内容のもので、諸書からの抜き書きや、漢詩や和歌、俳諧、などが雑然と書き込まれており、季硯の句集として編まれたものではない。

三 季硯、冠季の俳諧活動と出雲俳壇

ところで、出雲俳壇といえば、大磯義雄氏が、『岡崎日記と研究』(未刊国文資料刊行会、昭和50年10月)、「高見本『岡崎日記』元禄式」の出現と去来門人空阿・空阿門人百羅(『連歌俳諧研究』87、平成6年7月)で報告されたとおり、去来の甥である空阿(水鶏坊と号した。大磯氏は去来の庶子かと推測されている)から伝授を受けた広瀬百羅(百羅とも記し、茂竹庵と称した。享保十六年(享和三年)の存在が注目される)。

百羅は出雲大社の社家(千家家の代官役)に生まれたが、その母は手銭家の二代目茂助長定の娘であった。季硯、冠季は、この百羅と親交が深く、『松葉日記』中にも、「茂竹庵のあるじは、予か生縁のしたしみあり」と記し、「兼ては風月のおもひあつく、故翁の跡をしたひ、落柿の源をさぐり、あやうき梢にのぼりて、正風直巨の熟柿を得たり」と、百羅が京都で去来の伝を受けたことを指す記述がある。さらに、「故翁落柿の俳恩は更にして、今猶水鶏坊を慕ふも、百羅道人のゆへあれはなり」と、百羅に去来の伝を伝えた空阿を慕う気持ちも記されている。

また、大磯本『岡崎日記』を写したのは儀満持矩²⁾だが、その儀満

家と手銭家にも縁戚関係があったという。とすれば、百羅が京都から出雲に持ち帰った伝書類は、季硯や冠李ら大社の俳人たちの間でも伝授や書写が行われたと想像される。この点からも、記念館に伝わった俳諧資料と、季硯、冠李の俳諧活動は注目に値する。

ところで、出雲俳壇の研究として著名な、桑原視草氏の『出雲俳句史』(私家版、昭和12年9月・だるま堂限定版、昭和53年4月)、『出雲俳壇の人々』(だるま堂書店、昭和56年8月)の両書には、季硯、冠李に関する記述は見当たらない。大磯氏も「高見本『岡崎日記』『元禄式』の出現と去来門人空阿・空阿門人百羅」において、桑原氏に照会したが「季硯は不明」であったと記している。

いっぽう、大磯氏は『岡崎日記と研究』で、季硯の句が雲裡坊(元禄六年〜宝暦十一年)編『蕉門名録集』(宝暦二年刊)に記載されていることを指摘されている。そこで、管見の限りではあるが、当時の俳書を読んだ結果、美濃派の洗耳(沾耳)坊(生没年未詳)の俳書に、出雲俳人たちの入集が確認できた。すなわち、沾耳坊編『七十子』(寛保三年刊、芭蕉五十回忌追善集)には冠李の句が載り、同じく沾耳坊編『梅日記』(延享二年刊)には「出雲 大社」の杜千・柳波・五溪・冠李・関山による表六句が収録されている。

また、大社から20km程度南東に位置する三刀屋では、当時、美濃派の俳人が活動していた。『蕉門名録集』には、三刀屋の魯什、石泉、酔月、寸松らも、大社の俳人たちと共に入集している。記念館に残る資料に拠れば、季硯や冠李たちが彼らと交流を持っていたことも確認できる。つまり、季硯や冠李たちは、百羅を通じて大社にもたらされた去来の伝を継承しつつ、同じく出雲三刀屋の俳人とも共存していた。このことが大社俳壇の特徴であると指摘できよう。

四 『蕉門名録集』所収の季硯発句

さて、『松葉日記』所収句との比較のため、『蕉門名録集』に収録された季硯の発句を以下に掲出しておきたい。なお、『蕉門名録集』には、「出雲州 大社連中」として季硯・李夕・五溪・冠李・素川・飄尾・文裏・呂植・雲坡・魯川の発句が収録されている。

しら梅やいづれの枝を銀河
ゆづり状書て老たる柳かな
季硯

(『蕉門名録集』春之部)

魂ならば小町なるらん杜若
季硯

海辺納涼

枕より跡より涼し海の音
季硯

百年のことし出雲大社新に造営ありけるに、予、大病快然を得て詣奉る折からに
全

新なる千木も命のしげみかな

比は水無月の末也けり。及なき身も、行がりの旅寝に、此勝景の言種も猶恐れ思ひながら、八景名尚季をもて拙きなごめとはなし侍りぬ。

近江八景 各夏季

石山秋月

明安し石ずり山の秋の月

三井晚鐘

大和路は三井より告て秋ちかし

辛崎夜雨

から崎や夕だちとても常の雨

堅田落鷹

堅田いま鷹の留主居や杜鵑

比良暮雪

雪ぞとも比良にゆふべの雲の峰

粟津晴嵐

粟津よりうみにひたすや青嵐

矢走帰帆

帆に蝶のかへりも涼し琵琶のうへ

勢多夕照

長橋やなかば夕照る夕すゞみ

右於石山寺麓

雲州大社 錢季硯拜書

聖廟法楽

神垣のひだりは青し梅紅葉

何の葉の雫に染て鮎の泫

秋来ぬと木ずゑは鴟のにへあがり

あさがほや棚に餌を呼ぶ鳥の声

鳴鹿や頭にたく香も消て行

山河の出て来る世話やいく時雨

山家庭上の清流に

遊仙の沓もながすや落葉川

〔蕉門名録集〕冬之部

季硯

おわりに

以上、簡単ではあるが、季硯を中心に、大社の俳人たちの活動とその特色について検討を加えた。繰り返しになるが、従来、その具体像が知られていなかった享保・宝暦期の大社俳壇の実態を明らかにするために、手錢記念館に伝わった俳諧資料は大変貴重な存在である。ここに『松葉日記』を翻刻紹介する所以である。

注

- (1) 冠季が誰であるかについては、これまで手錢家においても不明とのことであったが、ごく最近になって、手錢記念館事務局長の手錢裕子氏の調査により、手錢家の墓所内の墓石が確認され、戒名が花菴行栄居士であること、寛政八年十二月十五日に七十八歳で没していること、二代茂助長定の子であること(すなわち季硯の弟であること)が確認された。
- (2) 復本一郎『蕉風伝書における「皮肉骨」についてのノート』、『古池之解』を紹介しつつ、「神奈川大学『国際経営論集』1、平成2年3月)では、学習院大学宮本三郎文庫に儀滿持矩が書写した『古池之解』が所蔵されていること、同書は百羅が空阿から譲り受けて持ち帰った伝書を書写したものである可能性が高いことが指摘されている。

〈凡例〉

翻刻にあたっては、概ね通行の字体を用いた。

句読点、濁点は適宜補い、改行も適宜改めた。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「をつけ、（）内にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。

誤記かと思われる箇所も原文どおりに翻刻し、適宜その傍に「(ママ)」を付した。

見消チ等で訂正されている箇所には、句形の異同が分かるよう、注を付して翻刻の末尾に示した。

参考のため、原本の凶版を最後に示した。

〈翻刻〉

元日や海山かけて祝ひもの

月星の国も富士より明の春

蓬萊の裾野つゞきや門の松

むめ咲やぬしなき庵のうす煙

芽柳に見られてむめの笑ひ哉

見ておかん娘とりよしを初ごよみ

梅遠薫

むめさくや遠寺の鐘も匂ふかと

ながき日や花にはいわぬ事ながら

禪寺に遊ぶ

わすれたる髪の匂ひやむめの花

一日は精進もの、はな見かな

蛙なく水田の上やうす月夜

残るゆきやがて消るとおもへばや

白魚やこゝろのあるとおもはれず

「(1オ)

「(1ウ)

ふところの子もすかされし桐かな

うぐひすのなくや笈に水の音

大やしろに詣奉る^①「(2オ) 折りから、花のさかりければ

是はまた八色の外敷花の雲

ある僧をまねきけるとき

樹々の芽や野の有さまを膳の上

病家見舞

へぐやうな日にく山のうちがすみ

角落す鹿や彼岸のうしろまへ

行脚の何がしを送りて

見送らん雲雀の上るところまで

野遊びや常行道は有ながら

鬼のなくところもありて涅槃像

燕や何のあんばいをはしらだて

色くくに餅も染るや雛あそび

回国の何がしを送る

花がさや日本晴のうしろがけ

春雨や日にく水の人ちかき

満花の峯に遊ぶ

物洗ふ女たづねん花の雲

飯蛸や飯次ともに喰仕舞

つながれて牛の匍匐に柳かな

うぐひすの誘歩行や桃のはな

咲揃ふ日は草臥てふじの花

春雨や初手から念を入れて降

「(2ウ)

「(3オ)

「(3ウ)

「(4オ)

題窓前竹

竹植てうぐひすまつや窓の前
膳③のめし喰ふ人はなし桜狩

柳にて会釈ある人へ返す

柳には糸のたけありいかのぼり

羅硯両風士に訪れける折から、雨の有ければ

春雨や客ふたり得て猶しづか

山家の花に遊ぶ

むしろにも屋根にも花の住居哉

行春に近道ありや老の山

行春や野は陽炎のもへすさり

今夜は何がし亭に止宿せんと、遙に見やりける行路の吟

見て行ん雲雀の落る其ところ

何がしに止宿して

うぐひすに起さる、朝のこゝろよさ

鶯の機こしらへや糸やなぎ

誰彼と共に、何がしあるじに招かれける時

雲に入けりな一連くろ羽織

庭前の風流

春広し土筆蕨も堀の中

清心山に遊ぶ 端書略

春風や鐘はどちらへこぼる、ぞ

朧夜やかつら男も温泉友達

是は温泉見舞の句 端書を略

梨子の花咲やさくらの通りがけ

「(4ウ)

「(5オ)

「(5ウ)

「(6オ)

「(6ウ)

花時酒一樽

さくらには何折くべん酒の爛
咲花や我身の老はかへりみず

一夜塚の記

恐るべきは靈魂にして、うたがふまじきは因縁ならん。爰に
俳諧正風の大祖師「(7オ)芭蕉翁の石碑を建んとするに、心
に叶ふ靈地を得ざればむなしく年月を経過せり。しかるに此
円通場は神光禪寺の別境にして、人家よきほどに隔たり、後
は御崎山峨々と峙ち、月も神代の光を伝へ、谷深ふして「(7
ウ)水いさぎよく、又なき風境と言つべし。されば、一基の
しるしを願ふに、聊さはる事なく、院主是をゆるし給へり。
幸なる哉、境内に石あり。其高さ六尺にあまり、四面三尺に
過て、まさにけづりなせるがごとく、則是を乞求て、遂に「(8
オ)一夜塚とは崇敬し侍る。爰に此名ある事は、狼も一夜は
やどせ芦の花といへる故翁の真蹟にもとづきて、斯は銘じ侍
るなるべし。于時宝曆四甲戌三月四日、あまたの高僧を供養
して点眼の法会を行ひ侍りける。」(8ウ)ある夜、靈魂禪室に
来て戸をたたく。和尚臥ながら誰ぞと問給へるに、芭蕉翁也
と答へ、法会の懇志を謝して、今は立去り給ふよし。むかし
は仏頂禪師に参じて、一椀の茶に大道をさとり、此日は神光
禪師の「(9オ)回向によりて、まさしく仏化に至れる事、何
のうたがひかあらん。恐るべし尊むべしと、百拝稽首して筆
をとらむ。

うぐひすも経よむ花の梢より

宝曆四甲戌三月四日

〔9ウ〕

峯葉師参籠記

此高院の本尊は、瑠璃光如来にして石仏とかや。むかし八雲
たつの社、唯一に改れるの頃、爰の靈境に移し奉るよし。数々
の靈現、拙き筆に記するも恐れあれば略し侍りぬ。堂場は御
崎山の〔10オ〕麓に峙ち登る事三曲にして、危磴けはしく緑
樹四隣を掩ひ、庭前に芭蕉の一株有て粟津の面影も床し。梅
花薫じて春を笑ひ、柳吹れて糸をみだす鶯のうたも、琴弾鳥
も、都ては御法の声〔10ウ〕とや聞ん。暮て閑に月にむかへ
ば、乙見の松に朧を移し、漸春もほど過るより、青葉若葉の
枝を交へ、ほと、ぎす、しばぐをとづれ水鶏も空にた、き明
て、初秋の風の身にしむ頃、鹿の哀もかけ樋の寂も、木葉の〔
11オ〕時雨にはなどかまさらん。高浜のゆふべは雪の波よる
と詠じ、三瓶がたけに雲のか、れるも、皆是造化の天工とい
ふべし。宿願ありて、此春二夕三日の膝をやすんじける折か
ら、此風興を算んとするにいとまあら〔11ウ〕ざれば、禿筆
をそめて如来の宝前にぬかづき、藤の一枝を奉るのみ。

百八をつらぬく玉や藤の花

茂竹庵のあるじは、予が生縁のしたしみあり。兼ては風月のおもひ〔12オ〕あつく、故翁の跡をしたひ、落柿の源をさぐり、あやうき梢にのぼりて、正風直旨の熟柿を得たり。されば、花にうかれ、鳥にさまよひて、北陸の雪に跟をやぶり、東南の月に腸をたつ、いそのかみ〔12ウ〕古きながめを尽し

て、行衛定めぬ身とはなりけらし。馬書の伝へもほどへだ、
りけるに、此春筑紫行脚の杖をまげて草扉をた、かれし事、
よろこぶにあまりあり。
月や花にならべて見たりまめな顔

〔13オ〕

吟杖の折から、円通場に立寄て暫時春暖を憩ふ
肘杖の袖にこぼすやつぼ董

万死をまぬがれ三とせの此日、大社の新殿に詣ける折からに
奉る
〔13ウ〕

新なる千木も命のしげみかな
雷のあとこ、ろよしほと、ぎす

下やみの初手を染たる青葉哉

行脚の風騷

笠かけよ藜の杖になる日まで

天の戸も明はなしなり夏の月

〔14オ〕

或僧に訪れしとき

物くさき中に蓮の浮葉哉

或人の物かき給はりければ

涼しさの石に入れり筆のあと

或人に尋られ打解かたらん事を

〔14ウ〕

いざまくら瓜もはたけに此ごとく

染色の山のしら地や雲の峯

葵さく垣や階子のひとつ宛

題扇

ならさぬも掟の数やもち扇

あつさしのぎがたくて、人の「(15才)もとへ寄、まくらをか
る

身ひとつを座しきへ瓜の涼哉

西国に赴行脚の何がしを送る

言伝もあすの鷹まつ別かな

ほと、ぎす覚ての声はなかりけり

鷲にさへ五位あるものをほと、ぎす

寫遊びの折から、鮑とりなどの興ありて

樂天は知らずや夏の鮑とり

旅人に対して

杖も根をおろせ木下は闇なりと

風なきにまはるは誰そや風車

或亭にいたりて、こゝろやすくもてなされければ

おもふほどひろげて涼しもち扇

番やしきといへる処のあるじ、対して

ほと、ぎす聞もらさじと番やしき

ものいへば唇さむしと、故翁の金言を信じて

ひらかぬを扇の涼み所かな

彼上人へ対して

百八を合せて涼し夏の露

萍も散こゝろなり五月雨

心ある風騒とかたりて

ゆきたけも同じはたへの裕かな

五月雨の昼寐や眼がねかけながら

尺八稽古の人へ

耳涼し心の竹になる時は

魚の行道咲わけよかきつばた

蝶鳥も知らぬ宿あり今とし竹

まくらより跡より涼し海の音

清水哉さても夢哉命かな

己が代をわすれて鳴や松の蟬

何がし庭前

おのづから塵なし苔の花むしろ

敦盛の塚にて

扇つかふ人も恨しむかし塚

西宮に詣て

元やすの神託もあり夏神樂

つくしの人に訪れける時

河百里海百里山ほと、ぎす

粟津にて

とりはらふ空や粟津の青嵐

矢橋に船の往かふを見て

帆に蝶の往来も涼し琵琶の上

石山寺にて

明やすし石も蓮の山の月

瀬田にて

長橋や半夕照ゆふすゞみ

比良の暮雪とはいづれの境なるやと、里の男に尋て

雪ぞとも比良にゆふべの雲の峯

堅田にて

「(17才)

「(18才)

「(18才)

「(19才)

「(19才)

堅田今鷹の留守居やほと、ぎす

唐崎を眺望の折から雨のふりければ

唐崎や此夕立も常ながら

越の白峯にて

へだて、はかくともしらね玉芙蓉

白峯や見おろすは雪と雲の峰

川狩や橋の下から通ひ盆

夏草や摘残されしつぼ菫

ほと、ぎす星のあかりや雲ちぎれ

思ひ入山は鹿よりほと、ぎす

みちのくなる自好法師に訪れて

橘や袖のやつれはむかしにも

自好法師の旅窓を叩て

石文の風も薫るや笈日記

笑談三日もいと深切を尽くし、「(21オ) けふや別にのぞむ。貴

老は七十に近く、予は五十にたる。山海五百の里程、再会の

思ひ遙にして、其情尽しがたし

別かな涼しひ国の出合まで

故翁の跡を慕ふ無所住の風騒に対す

萍の花や根とてはおろさねど

会釈

打水もとゞけ五尺のあやめ柳

来成の神社遙拝

千木高し青葉若葉の梢より

吟行旅人を誘ふ

「(20オ)

「(20ウ)

「(21ウ)

「(22オ)

水鶏なくやどを今夜の旅寐哉

端略

寐て待ん夢の果報やほと、ぎす

花ならでかへり若葉のやなぎかな

短夜はよし寐ぬとても新茶哉

花姫の花もいつしか母子草

夕がほや終に隣の家根に咲

秣負ふ人の肩より蜘蛛の声

あのうたのいつか穂に出ん田草取

妻もたぬ身には摘せそ紅の花

余の鳥になかせはせじと行々子

ねり雲雀やぐらの夢は刈の舞

なげ入を終に喰けり蔓いち子

御崎山の麓を通りけるに、此あたりは須戸の風景に似たりと

ある風騒の申され「(23ウ) ければ

名所も人のたよりやゆふすゞみ

故翁落柿の俳恩は更にして、今猶水鶏坊を慕ふも、百羅道人

のゆへあればなり

た、かる、心水鶏の鳴にさへ

雲こ、ろなしとも見へず今朝の秋

はつ厂や何処を堅田のわたり口

秋もや、団扇の紙の骨はなれ

妻乞のあと踏わけて木実取

きりぐす一声づ、の灯のほそり

同じ野の錦ながらも若たばこ

「(22ウ)

「(23オ)

「(24オ)

「(24ウ)

老懷

うらやましいつの秋にも四十雀

ほむる人なき御馳走や玉まつり

名月や花には寐たいこゝろあり

暮かゝる日を引とめて紅葉かな

秋来ぬと梢は鴟のにへあがり

落鮎や一葉飛込む其日より

何の葉の雫に染て鮎の洪

野分より裸そだちや鶏頭花

朝貌や棚は餌を呼ぶ鳥の声

鳴しかや頭にたく香も消てゆく

稲妻やいつの光を稲の殿

見物に骨おらせたる相撲かな

何がし庭前に対し

杖ほどの竹四五本に月深し

伽ほしい心になりぬ秋の風

立さかる市も地声や盆かざり

越路帰杖の折から、都の人に誘はれ、七夕をまち得て伏見へ

下る

七夕やふし見の船へ寐に下る

茸狩や人も紅葉を踏わけて

三刀屋といへる里の名は、「(26ウ) 神のむかしの謂れも有よし

稲妻や神の釵の光より
中嶺山普光寺は、世にいふ峰寺とかや。昔日行基菩薩、此山をひらき給ふよし。」(27オ) 幾とせのむかし、限しられず。本

尊観世音、利益あらたましくけるより、順礼納経の旅人

絶歩を運ぶ。伐木の禁戒ありて、松柏おのづから枝をまじへ、

山色」(27ウ) 鬱蜜として、うぐひす、杜宇、ねぐらをあらそ

ふ。不貪して夜金銀の気をしり、害を遠ざけて朝に鹿麋の遊

ぶを見ると言ひしも、此境ならんとゆかし。一日」(28オ)、魯

川子に誘れ此寺に詣て

尊さや腰かけるところ岩蓮花

右、三とや岑寺に遊ぶの吟也。

日御崎にて

昼をこそ暮ては月の御崎とも

鐘の音もちぎれくや小夜時雨

白露の苔ひらくや霜の花

置しもや一朝づ、の草の茎

山賤の絵に似て通ふかれ野かな

炭がまや何木の匂ひもしれず

時雨る、や隣歩行も旅すがた

松わだやの積り見せたる十夜かな

大仙遥拝

大仙や冬の最中を雲の岑

ちらはらと小鳥をへらす時雨かな

青鷺の杭に成たるさむさかな

遊仙の沓もながすや落葉川

羽織着た人を上座や里神楽

木葉さへ踏ぬこゝろや神集
埋火をさがして庵の出し茶哉

ふところのかたぎぬ出すや御取越

づ、くりと山案子（山案子）もたつや初しぐれ

追れたり追ふたり波の磯千鳥

市中は将棊に似たり年の暮

猶（猶）おしめ年もながれの女子ども

弥生の風流は筑紫にとゞまるよし、肥後の風騒天山子の物が

たりも、其むかしゆかしくこそ

橘の香やうすもの、袖になを

昼貌や人の昼寐の中を咲

夏の夜やゆかたの冷の気にか、り

むさし野は草よりたつや雲の峰

後の世は何に生れんほと、ぎす

ほと、ぎす何にも知らで鳴にけり

扇を給はりし人のもとへ

端書略

舞もしつ又は暑サの玉は、き

（白紙）

よろこびにもる、物なしかがり藁

むめ咲やふれども雪の地に落す

うぐひすや庵の見舞の往もどり

野遊びや何にならねどつぼ董

文庫から雲に入けり風

渡らずにたちのく橋の柳かな

めでたひと言ふ日に咲や梅の花

人丸千五十年忌

「(30才)」

「(30ウ)」

「(31才)」

「(31ウ)」

「(31才)」

「(31ウ)」

「(32才)」

「(32ウ)」

あふがれてひれふる峯に帰馬

勝季風のぬしは農家に名あり。ことし、安永の春を待得て賀

筵のまふけありけるを祝し侍りて

萬歳を門田の当や種をろし

ある時は子にも鳴らん秋の鹿

長谷氏の何がし、やめる事ありけるを、はやくも快復あらん

事を祈るに、はいかい首尾の吟を綴り、其鬱情をいさむる連

句の中、鶴亀松竹を以て祝意をうたふ。誠に笑談の拙章、見

る人笑らふべし、く

竹子や喰残されて今とし竹

こ、ろよいもの夏の朝起

飼鶴もすり餌の音に目覚して

石でかけたる橋のたしかさ

達者なる脚や月見に三里五里

これも食補と菊の諸白

ぬけてゆく秋ともしらす松の色

箔あたらしく絵馬尊き

鉄漿かくす笠のくけ緒のひちりめん

祖父は祖父でも伯父のといへ

こりやくと花の宮笥を袂から

日もあた、かに背をさらす亀

孟夏日 白澤園

四季混雑

梅は美麗繁花なれども大木なし。檜楠の人目にた、ぬ天地自

「(32ウ)」

「(33才)」

「(33ウ)」

「(33ウ)」

「(33ウ)」

然の風情と、猶幾千代の春の栄を思ひもふけて、めでたかり
けれ

人は兎もいへかし楠の若みどり
〔34オ〕

加茂の何がし、隨草、風医と野遊びの折からに

野遊びや紛た草の名もわかり

長谷寺の花に遊ぶ

はし書略す

手折なよ花にも慈悲の御誓
〔34ウ〕

送別

見送れば蝶も出てもふ駕の前

野遊びや一ふしあまる杖の丈

ふしながら見るはづはなしけふの月

暇乞した名月をけふの月

金銀瑠璃碑磔

瑪瑙珊瑚琥珀

〔35オ〕

といへば、金銀は第一の宝と見えたり。猶、具足延命こそ万

宝の最上ならんと賀し奉りて

懸ぞめやみな豆板の三百目
〔35ウ〕

高橋の鳩飛閣も人しれず一時に成就と聞へければ

雀にもしらせず早稲の穂屋つくり

すみ絵の松ある扇に発句せよと望れ侍る

日黒みの松やまつかさ投ながら

名月やいな、けばこそ白月毛

(白紙)
〔36ウ〕

(白紙)
〔37オ〕

(白紙)
〔37ウ〕

注

(1) 「は」「も」を、「他」は「中」を見消子にして訂正する。

(2) 「は」「を」を見消子にして訂正する。

(3) 下五は「山桜」とあったものを、「山」を見消子にして「狩」を書き足して訂正する。

(4) 「の」は「は」を、「なる日まで」は「ならずとも」を見消子にして訂正する。

(5) 「いつか」の右脇に「頓て」と書き添える。

(6) 「景」は「興」を見消子にして訂正する。

(7) 「も」は「の」を見消子にして訂正する。

(8) 「に成たる」は、「かとはかり」を見消子にして訂正する。

(9) 「秋の鹿」は、「鹿の秋」を見消子にして訂正する。

付記

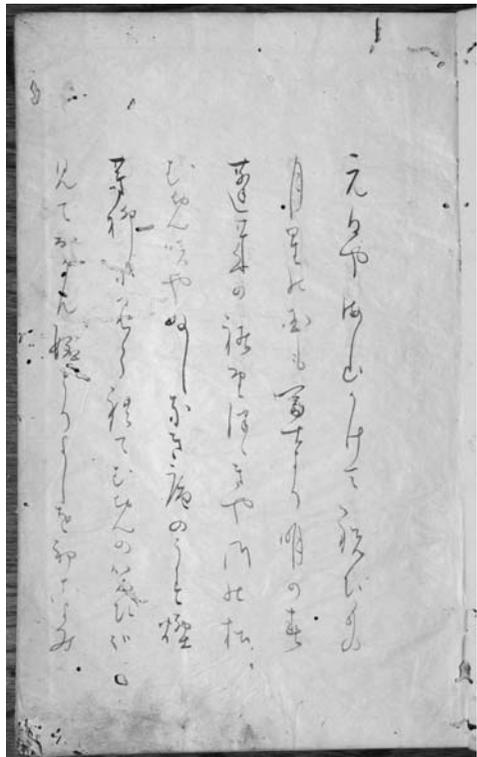
本稿をなすにあたり、手錢家の皆様には特段のお世話に預かりました。また、手錢記念館の佐々木杏里様には、細部にわたり懇切なご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の公開に関するプロジェクト」(二〇一三～二〇一五年度、代表・野本瑠美)、国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」(代表・大高洋司)の研究成果の一部である。

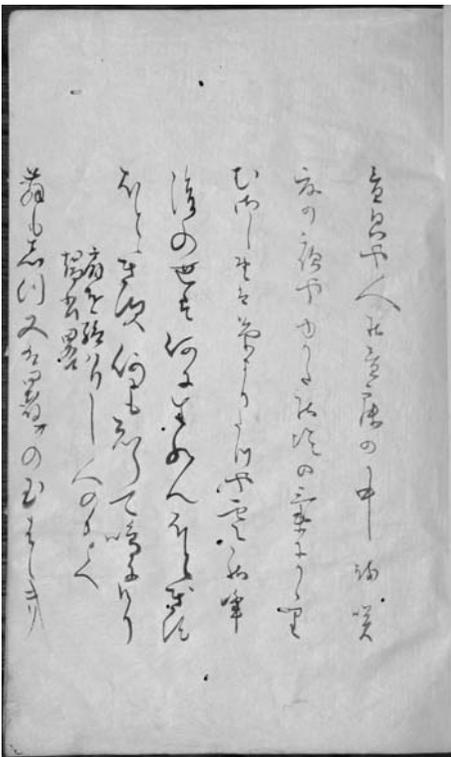
(表紙)



(二丁表)



(三十二丁表)



“Shoyo-nikki” by Kiken : reprint and introduction —A study of Haikai literature in Tezen Family Archives (1)—

ITO Yoshitaka

(Shohoku College Department of Business Administration and Communication)

[Abstract]

“Shoyo-nikki” owned by Tezen Museum is a collection of haikai poems by Kiken.

Kiken was the third family head of the Tezen family. And he was one of the most important haikai poets in Taisha area. In Taisha, haikai poets had inherited the teaching of Kyorai, which was introduced by Byakura. And they coexist with Minoha-haikai poets in Mitoya. That is feature of them.

Keywords : Haikai, Kiken, Byakura, Taisya, Tezen Museum